ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.2 February 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS

・巻頭言
宗教学と神学の間
／井上　昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」（5）
おさづけ拝戴のあと
／深谷　耕治 2

・伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（39）
天理教教義翻訳の諸相⑥
／成田　道広 3

・英語文献にみる天理教（2）
The Japan Weekly Mail
／尾上　貴行 4

・特別寄稿
おやさと研究所滞在記
／邱　琡雯 5

・音のちから―中国古代の人と音楽（12）
出土楽器が語る音の世界―骨笛―
／中　純子 6

・ヴァチカン便り（60）
法王の辞任問題について
／山口　英雄 7

・天理参考館から（30）
「兎に角」、「脱兎のごとく」飛躍する卯年になりますように
／幡鎌　真理 8

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（23）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 9

・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（8）
第 5 講：119「遠方から子供が」
／森　洋明 10

・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（8）
第 6 講：126「講社のめどに」
／堀内　みどり 11

・おやさと研究所ニュース 12
第 354 回研究報告会（12 月 12 日）／「国際会議：井筒俊彦の東洋哲学を再定置する」を開催（12 月 17、18 日）／ 2022 年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」

巻頭言

宗教学と神学の間

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

前号で、カナダの宗教学者である Noll 准教授による神学批判を紹介したが、もう少し彼の提起した問題について考えてみたい。彼の考える学問としての宗教学は、自然科学をモデルとした安易な客観主義に基づく宗教学と言ってよいだろう。彼の議論には多くの問題点を指摘することができるが、ここでは彼の提示した「宗教学」と「神学」の対比に的を絞って検討してみたい。

「生物学者と実験室のカエル」の喩えに見るように、彼の宗教学者と神学者の対比は、「宗教を研究する宗教学者」対「宗教を実践し擁護する神学者」といった単純化された図式の中でなされる。彼の対比は「宗教の外側にいる者」と「宗教の内側にいる者」との対比、すなわち「自分の信仰を棚上げして宗教を扱う者」と「信仰者として自らの宗教を扱う者」との対比と言ってよいかもしれない。勿論、彼の描く図式では、前者が宗教学者であり、後者が神学者ということになる。

しかし、彼の議論は、彼の抱く理想的な研究者としての宗教学者像と批判の対象として設（しつら）えられた神学者像を対比しているに過ぎない。彼が「宗教を実践し擁護する神学者」と言う時、その神学者は限りなく宗教家に近い存在であり、学問としての神学を営む者（神学者）と宗教を信仰しその教義に精通する者（宗教家）の区別が極めて曖昧になっている。だが、ここでなされるべきは「宗教学を営む者」と「神学を営む者」との対比であって、「宗教を研究する者」と「宗教を信仰する者」との対比ではなかったはずである。

神学者と宗教家の間に境界線を引くことは確かに難しい。しかし、両者の違いに十分に注意を払わずに論じたがために、彼の「生物学者とカエル」の比喩は議論の始まりと終わりで齟齬をきたしてしまう。初めに「宗教研究者（宗教学者）と神学者」の関係を「生物学者とカエル」の関係に喩えたはずが、宗教研究者の研究対象が神学から宗教それ自体にすり替わってしまい、生物学者がカエルを解剖するように宗教研究者が宗教やその信仰体系を解剖すると論じてしまっているのだ。「生物学者とカエル」が「観察者と被観察者」の比喩を意図していたとすれば、それは「宗教研究者と神学者」の関係より「宗教研究者と信仰者（宗教家）」の関係を説明するのに適した喩えであったと考える方が適切であろう。

Noll 准教授は、宗教を信仰することと神学を営むことを同一視したまま、宗教学と神学の関係を論ずることになってしまった。しかし、宗教学と神学を比較するのであれば、「学問」としての神学とは何かを明確にしておく必要がある。さらに、「神学」と「信仰」という 2 つの営為の関係についても慎重に検討するべきであろう。ここで浮上してくるのは、信仰は神学にとって必要か？ という問いでもある。これらの問題は、神学の分野に限らず、研究者が自らの信仰する宗教を己の学問によって研究する際に対峙しなければならない問題であるはずだ。

彼は、大学のホームページの自己紹介欄で「学生には宗教に対する個人的な関わり合いから一歩退いて、宗教一般についての問いかけをするように指導している」と述べる。これは、対象から離れて客観的にそれを研究することが学問のあるべき姿であるという主張である。だが、彼の客観主義的宗教学は、宗教学者が自らの信仰する宗教を研究する際の困難性について（彼の比喩を借りれば、生物学者が自らを開腹し、その中を弄（まさぐ）るという苦痛や苦悩について）、全く関知しない。